

納棺師 思い重ねて

「おくりびと」で注目 その実情は

映画「おくりびと」のアカデミー賞受賞で注目が集まる「納棺師」。かつて親族や地域の人々がその役割を担っていたが、在宅死が減り、病院死が増えるにつれて専門職としてのニーズが高まってきた。身近でなくなった死を日常に取り戻し、穏やかに故人を見送りたい。そんな思いが込められている納棺の実情を探った。(千葉雄高、山田理恵)

「納棺師になるにはどうしたらいいですか」。「おくりびと」の主演俳優、本木雅弘さんに演技指導をした株式会社「納棺協会」(本社・札幌市)のもとに、こんな問い合わせが相次いでいる。

同社は84年に設立された。故人の衣装の着付けや化粧、損傷した遺体の修復などが主な業務。映画の影響で、広く知られるようになった「納棺師」だが、元々は社内限定の呼び方だった。

- ① 映画「おくりびと」で納棺師を演じた本木雅弘さん(右端)に演技指導をする納棺協会の社員ら
=納棺協会提供
- ② 映画「おくりびと」のワンシーン
©2008映画「おくりびと」制作委員会

着付け・化粧 半年訓練

遺族らが見ている前で、布団に寝た故人が着ている服を脱がし、体をふき、宗派や遺族の希望に合った衣装を着せる。この間の作業は、故人の肌が見えないよう手探りで進める。最後に化粧と顔そりをして、棺に納める。時間は1時間ほど。元々、身内や地域でしていた所作に儀式の要素を加えた。

同社で「納棺師」になるには、短くても半年間程度、訓練を積む必要がある。納棺の手順のほか、和服を中心とした着付けや化粧の技術、葬儀、仏事についての知識も学ばなければならぬ。社内の実技試験をクリアして、ようやく名乗れる。現在、同社には約130人の「納棺師」がいる。

同社の堀江満本部長(39)は「我々は、ご遺族が故人をお送りするため

の手伝いをする黒子ですが、そうした送り方があることを知っていただけるのは幸いです」と話す。

大阪市野区の葬儀会社「貝本」は葬儀の際、遺族の希望に応じて、納棺協会に納棺師の派遣を依頼している。貝本高宏社長(49)も06年春、72歳で亡くなった母親の葬儀の際、納棺師を呼んだ。

女性納棺師が丁寧に母のお気に入りの着物を着せ、5日間の仮通夜の間、毎日通って化粧をし直してくれた。ほおはふっくらとなり、生前のような柔和さをたたえていた。「厳かな儀式に臨む納棺師の作法はもろろのこと、故人の顔を自然に美しくする技術はすばらしい。最後に母にしっかりとあけられた」という満足感があつた」と振り返る。

親族 死受け入れる儀式

「僕ら、業界の人間にとっては、『おくりびと』は、ある地方独特の納棺を映し出したイメージです」

葬儀の相談や適正価格を調べるNPO法人葬儀費用研究会の富永達也事務長はこう話す。映画では体をふいて清めるシーンが印象的に描かれている。納棺の方法は地域によって様々で、湯に入れる「湯灌」もある。「最近では病院で亡くなる人が多いため、自宅で湯灌や納棺をする人は珍しくなっています」と富永さんは言う。費用は、遺体の状況や着衣などによって大きく異なるという。

葬儀や墓の文化に関する雑誌「SOGI」の編集長を務める碑文谷創さんによると、昔は病院より自宅で亡くなる人が圧倒的に多かったた

め、死後の処置は、近所や親類が集まってした。それは、親族が自分たち「故人」に「死んだんだ」と言い聞かせる作業でもあった。「酒を飲んだ後、酔っぱらって作業し、遺体が転がったなんて話も残っています」と碑文谷さんは言う。

しかし戦後、病院で亡くなる人が増えると、死後の処置は看護師や葬儀会社、納棺を専門にする業者がするようになり、家族が遺体に触る機会は少なくなった。

「死が生活から遠ざかり、現実感を見失いつつあるとき、死を人間的なものとしてたぐり寄せたのが『おくりびと』。だからヒットしたのでしょう」。碑文谷さんはこう分析する。

